

Trial&Error

試行錯誤



西崎 寛司さん(ソクサン村にて,
1980, 11, 18)

西崎さん追悼

ウボンキャンプ紹介

尊い生命

1981年4月16日 タイの国境の町アラシヤ
プラテートの近くで 一人のボランティアの 日本
の青年 西崎憲司君の生命を奪った 一発の弾丸^{たま}
弾丸よ おまえは知っているか おまえがこの地
上から失わせた生命^{いのち}が どんなに尊い生命^{いのち}であった
か この一年 酷暑のなんヵ月も 水びたしのなん
ヵ月も 黙々として働いて 飢え つかれ 病み
絶望に心を暗くしていた なん十 なん百 なん千
の カンボジア難民の生命^{いのち}を救ってきた その青年
の生命^{いのち}

これからも なん十 なん百 なん千の 難民の
生命^{いのち}と 生きる希望を たくましい肩^{にたな}に荷おうとし
ていた かれの志^{こころざし}

日本に 老いた両親を置き としてまた安穏な
きまりきった 生活としきたりを去って アジアの
苦難な境遇にある人たちに みずからの心^{こころ}を通わせ
相ともに生きようと 新しい日本の若者の生き方を
身をもってあらわしてきた その生命^{いのち}

日本の若者の愛と知と 明日の世界への志^{こころざし}とを
一日一日 タイの大地に刻みこんできた男

弾丸よ おまえは知るまい おまえが奪ったのが
どんなに尊い生命^{いのち}であるか

1981年 4月18日

栗野 鳳

西崎憲司さんの死を悼む

星野 昌子

少年期を過ぎて、澄みきった秋の空のような微笑を保つ日本男性は稀である。早くから強いられる苛酷な競争、自我を殺して枠の中にはめ込ませずにはおかない管理社会、そして商品合戦に引き立てられるあくなき物欲がそうさせるのであろうか、多くの笑いが追従、軽蔑、自己顕示、卑猥にけがれる中で、西崎さんのそれは無類に美しかった。豊かな口髭の間に広がる健康な白い歯並びと真摯なまなざしが人々に安らぎを与えた。救援関係で国境を訪れた一米国女性、西崎さんの名前を思い出せず、「The Japanese man of beautiful smile」と言った時、居合わせた人は皆、「それはケン・ニシザキだ」と即座に了解した。

この静かな微笑が、間髪を入れずに飛び出すウィットに豊んだ冗談と交差するところが又、もう一つの彼の魅力だった。人々は腹を抱えて笑った。魅了されたのは日本人や白人達ばかりではない。下宿のおばさん、事務所の運転手、難民の集結地のクメールらの嫌悪もなく、ただ若くして逝ってしまった西崎さんがいとおいしいばかりであった。彼よりももう既に20年も長く迷い多き人生を生きてきた私が撃たれれば良かったのだと思った。

こうしていると写真の中の西崎さんが語りかけくるような気がする。

「この世の中にはどうして食べるに食べられないような貪しい人と豊かな人の二種類の人間がいるんでしょう。難民救援の根底を支えるのは愛です。生きとし生けるものへの愛です。そして愛は見返りを求めず、限りなく与えるものです」と。しかし西崎さんはこんな言葉を現実の口にする人ではない。頭のタオルをきゅっとしめなおして「さあ又少し働きましょうか」と言っ手振りながら歩き始めるに違いない。さあ私達も続こう！ 悲しみをのり越えて。

追悼文

田島 誠

西崎さんは、生前こんなことを言っていた様に記憶している。

「人間、死んだら終わりですよ。そして死んだ方には、美しいも悲惨もないのです。死は死、死んだら終わりですよ。」西崎さんは、この言葉を裏書きするかのように一瞬一瞬を大切に生きた。

「何時死のうと悔い無き様、今を精一杯生きる。」これが持論だった。

今でも眼に焼きついて忘れられない一つの光景がある。

サケオの日本メディカルセンターにあと数分という処で、西崎さんの左手が僕の右手をぎゅっと握りしめた。考えられない程強い力で、長い時であった。それが最期だった。

冷たい救急車の中で、僕と見知らぬ外人に見守られただけで息を引きとった。そして最期の言葉さえ言うことを許されない。こんな悲しい淋しい死があっていいものだろうか。西崎さんは、最後に何を言いたかったのか。

左頸動脈が切れており、普通の人ならとうの昔に死んでいようが、撃たれてから2時間弱、西崎さんは生き続けた。何という強靱な精神力であろうか。その2時間の間、西崎さんは一言も口をきけなかった。どんなにかくやしかったことだろう。あの2時間は僕の生涯にとっても最も長い2時間だったが、西崎さんにとっては、もっともっと長かったことだろう。「いたい」「苦しい」という言葉すら言うことを許されない。それ以上、最期に及んでも、何も言い残すことができなかったあの2時間、西崎さんは何を考えていたのだろうか。どんな慰めを言っても空しく、無意味に思う中で、最期に握りしめられた右手の感触だけが妙に生々しく残っている。あの時、西崎さんが手に込めた力の意味は何だったのか。それを追求して行くことは、僕のこれからの一生の課題なんだろうと思う。生き残った者は死んだ者以上に苛酷でなければならないのだと思う。

西崎さん、あなたはもう安らかに眠る道しか残されていないのですね。

そう、「流れに逆らわずに生きる」というのもあなたの持論でした。

どうか安らかに眠って下さい。 合掌

1981, 4.23

タイ・カンボジア国境での活動この一年

西崎 竜司

1978年暮に開始されたベトナム軍の侵攻によりこれまでの5年間民主カンボジア政府の強い統制下に置かれていたカンボジアの人々は、これを逃れるようにタイ国境、ベトナム国境へと移動を始めた。あるいは政府と行動を共にした人々はベトナム軍による圧力のため、これまたタイ国境へと押しやられた。

1979年に到って、難民となった数10万人の人々が、タイ・カンボジア国境あるいはタイ領内へと殺到した。当初、タイ政府はこれらを強制的に押し戻そうと試みたが、生命の危機が待ち受ける国内へ帰れる筈もなく、津波の如く押し寄せる人々の流れを押し止めることは出来なかった。その様な状況の中で秋にはサケオ、サオイタンと相次いでホールディングセンターが開設され、収容者は20万人を越えた。このような事情はマイルート、カオラン、カンブット、ルムバク、アランヤプラテートにも共通している。

これと前後してユニセフ、国際赤十字、各民間難民救済団体の救済活動も活発化していった。日本人には馴染みの深いもう一つの難民・ボートピープルに対する日本の対応の冷淡さが定評を得始めていた最中にも、旅行中の人、日本から駆け付けた人等個人的な救済の手は、ささやかながら差し延べられ始めていた。しかし、各機関の活動が安定化するにつれ、このような飛び込みの人達に対する門戸は次第に狭められる結果となった。

年は変って1980年の2月末、このような人々に食口を提供することを目的の一つとしてJVCがバンコクに発足し、これまで全く個人的にしか活路を見い出せなかった日本あるいは他の国々からの人々にも道が開かれたのである。そしてこの設立の前後からかかわれてきた多くの人の手から手へと受け渡されるようにしてタイ・カンボジア国境の活動が温められてきた。税田、中山、佐藤、遠田、池原、水野の各ボランティアを始め、多くの人の手にあつた活動の基盤は着々と整えられていった。JVCの活動対象地域としては、サケオ、サケオのホールディングセンター、ノンチャン、ノンサメット等の各種団体が軒を連ねる場所ではなく、より必要性の高い地域、即ち国境へと集中して行った。

しかし、設立から一年を経た今日まで活動の主力は物資の供給に限られている。そうなるざるを得ない原因は禁つがあげられ、それを克服することは未だ困難と思われる。主だった分野は強力な諸団体に占められてしまい、新参の出る幕はほとんどなくなつた上、

それらに割り込むには、力、経験、何の基盤もなくあるのは大和魂のみという状態が長く続いた。それでも各地の実情調査、物資の運搬等の活動は不定期的ながらも継続された。設立間もない2月末に大口寄贈品第1号として南部国境のソクサンへ贈られたトレーラーは、今日でも山中の村と林道を結ぶ唯一の補給路を1日2往復して、6000人の命綱の役目を果している。国際機関等の活動のなされていない地域に対する医療器具、医薬品を届けると共に診療にあたった小宮山医師が活躍したのもこの頃である。7月からは懸案事項の一つであった米国の救済団体CAREとの契約が成立し、その補助給食救済要員として、田島、ポールの2ボランティアがJVCから出向することになった。その後、この仕事は後藤、玉那覇、伊波、河西の各女性ボランティアがこれを引き継いでいる。この企画にはインドシナ難民を助ける会より8月から12月の3ヶ月間に合計1000万円の援助を頂いた。そして7月中旬にはJVCのアランヤプラテート基地が発足し、宿舎も整えられた。他団体の事業への協力と併行して、独自の活動も続けられたが、前述の障害の大部分が残されているため、思うような成果を挙げられ得ないままであった。カンボジア難民救済会より、機動力も完備し、本格的活動の条件も着々と整い始めた。9月末に成立したタイ軍、国際赤十字、ユニセフ、WFIP等との合意に基づき、日本大使館、松下電工、青年の船、その他の皆様より届けられた2万着余りの古着を中心とした物資の配布を10月から実施した。これらのほとんどを終了した12月からは野菜の種、農具、日用品の供給を続けている。1981年1月から西本願寺より月額100万円の活動費の援助を得、経済的基盤も確立され来ている。今後も野菜の種、農具、蚊帳、日用品の供給を続けると共に新しい企画も準備中であるが、これらの活動の効果は地味であり、目立つ程のものではない。理由として、次の3点があげられる。

1. 対象人数が多いこと。

現在活動中の難民村は10ヶ所以上に達し、それらのうち、最小規模のものでも人口2,500を越える。これに物資を供給するとしても1人当りの予算額は極めて小さなものにしかならない。

2. 他団体の活動が花弁でないこと。ほ

とんどの村では国際赤十字の病院と、ユニセフの食料配給が10日毎に行なわれる他には救援団体が時々物品を届ける程度である。同じ国境上の村のうちでも、ノンチャン、ノンサメットのように多くの救援団体が入り乱れている地域と同程度の状況を獲得するには極めて大規模かつ広範囲な援助が必要である。そしてこれは一民間救援団体には大きすぎる対象である。

3. JVCの活動分野が必ずしも最適ではない。医療等直接的分野での活動が行なわれず、これを欠いたままでは同じ予算であっても、最善の結果は得られないと考えられる。

以上から限られた予算内で或る程度の効果を期待するには次の方法がある。対象となる地域を限定して、その1ヶ所に援助を集中すると共に総合的活動分野を獲得する。しかし、現在の各情勢を見渡すならば、この方法は必ずしも最善の方法とは思えない。地域を限定することは、他の人々を見限る事としかなく必ずしも難民側を考慮した方法とは思えない。そこで著しい効果は期待できないかもしれないが、その必要を認めるなら、限られた資金で、必要とする物資を供給し、生活の基盤を整えるという一歩を踏み出す必要がある。これは、限られた資金で、必要とする物資を供給し、生活の基盤を整えるという一歩を踏み出す必要がある。

要として、限られた資金で、必要とする物資を供給し、生活の基盤を整えるという一歩を踏み出す必要がある。これは、限られた資金で、必要とする物資を供給し、生活の基盤を整えるという一歩を踏み出す必要がある。

追悼文・東京連絡事務所

4月17日の早朝、突然西崎さんが強盗に撃たれて亡くなったというニュースが突如込んできました。事のあまりの重大さと「あの西崎さんに限って……」という気持ちからすぐには信ずることができませんでした。しかし「何かの間違いでは……」という淡い期待も時の経過につれ、徐々に入ってくる詳細なニュースの前にかき消され、私達はこの最悪の事態を受け入れざるを得ませんでした。

関係当局との連絡、相次ぐ問い合わせに対する応答、正確な事件の概要を伝える「トライアル・アンド・エラー」号体の作成、印刷、発送に忙殺されたのはつい昨日のことのようです。

23日夜、成田空港でお父様に抱きかかえられてきた白い桐の箱を目の前にして、ようやく西崎さんが去ったことを実感させられました。それでも「西崎さん、そんなに小さくなって箱の中に入っちゃったんですね」と語りかければ、「いやあ、ちょっとした冗談ですよ」とニコニコしながらふらりと姿を現わすのではないかという気がしてなりませんでした。

そんな飄々としたユーモアを持ち、それでいてどこか非常に孤独で、不思議な存在感を帯びた人でした。

しかし、世界の中には難民救済と同じくらい、人々の心を癒やすという限り、私達は西崎さんの笑顔に問われ続けることになるでしょう。「いやあ、そんなことでは駄目です。彼の随やかで、しかもきっぱりとした口調が聞こえてくるようです。」

末尾ながら資金面、精神面で様々な御支援御協力を預いた多くの皆様に、心から御礼申し上げます。

期日	場所	人口(人)	供給物資	備考
16	スロイスラン (バンサング)	6,000	鍋、フライパン 127個 バケツ 100個 皿、碗、スプーン、フォーク類 400人分 砥石 10個 しゃもじ類 179本 バレーボール 4個 他多数 ノート 100冊 ボールペン 500本	合計 11,810.00バーツ この内、鍋44個、フライパン6個、しゃもじ類50本は守口市、及びYoung Volunteer Associationからの寄贈品
25	同上		白墨 50箱 釘、針金 各 50kg 鎌、鋤、巻尺他 鍋、フライパン 14個 ごみ 30枚	合計 8,313.00バーツ
27	アノムチット	2,500	バケツ 12個 石油ランプ 2個 文房具、他	合計 4,417.00バーツ

ウボンキャンプ紹介

ウボンキャンプ設立背景

ウボンキャンプは、ラオスにおける政変直後の1975年6月、東北タイの都市ウボン・ラチャタニから5kmほど離れたかつての米軍弾薬集積場跡に設立された。

タイにはこの他、6つのラオス難民キャンプがあるが、地図を見ればわかるように、ウボンキャンプは最も南に位置し、主としてラオス南部のカムバン・サバナケット・サラワン・チャムパサック地方から流入してきた難民を収容してきた。ラオス南部の都市バクセから来た難民も多いが、そこはかつて日本の青年協力隊員が活躍していたところでもある。そうした日本との関わり合いもあって、ラオスの首都ビエンチャンとメコン河をはさんで向かい合うノンカーイキャンプと並んで、日本への定住希望者を多く見出している。(この2つ以外のラオスキャンプは主に山岳民族のキャンプ)

キャンプの人口は、75年末には500人程度だったのが、78年には37,000人にまで膨れ上がった。その数はラオス国内の状況・タイ・ラオス両国の関係・先進国の難民受け入れの進捗状況等に左右され、一定ではない。80年9月には65人のラオスへの自発的帰国者も送り出している。81年2月段階で全部で約2万近いラオス難民が収容されている。

食糧水等の生活に欠くことのできない物資は国連から配給される。医療・衛生・教育等の分野は6つの民間国際救援組織(VOLAGと略称される)が担当して、活動している。(下表を参照)

JVCは80年3月から熊岡路矢さんを中心に自動車整備の職業訓練所の開設にとりくみ、6月から開校している。その後、日本やアメリカへ出国する人々に対する語学教室も併設、現在では生徒数600人を数えるまでに発展している。81年1月、半年の自動車整備士訓練コースを終えた14人の卒業式があった。彼らの多くは今度は先生になって、今度は同じラオス人に教える立場に回る。

またラオス民族の伝統文化を彼ら自身の手で守っていけるように、ラオスの民謡をレクリエーションに取り上げ、民族舞踊を踊ったりしている。2月には織物教室も完成した。ラオスの手芸品のモダンなデザインと色の取合せは有名だ。目下、日本での販路を深めているところで、もし計画が順調にいけば日本人やラオス人の手による手芸品を愛用するところになる。これはラオス人の生活向上に大いに役立つと期待されている。

ウボンキャンプで活動している

主な民間国際救援機関

(VOLAG)

医療: The Save the Children Fund

国境無き医療隊(MSF)

衛生: Food for the Hungry International

教育: JVC

Seventh-Day Adventist World Service

その他: International Christian Aid 等

—まずタイへボランティアに入る
前史から伺いましょうか。熊岡
さんは1947年、東京に生まれ、
70年に大学を出られて自動車修
理見習工となられたんですね。

いえ、ぼくらが大学へ行っていた67、68、
69年頃はちょうど全共闘運動が盛んな頃で、
ぼくは東京外国語大学へ通っていて、別に特
別な活動家というわけではなかったんですけ
れども、非常に感ずるところがあり、70年3
月の卒業を目前に大学を辞めたんです。その
頃、中国の文化大革命の影響もあったんじ
ょうか、知的労働と肉体労働の統一というこ
とがしきりにいわれました。それでぼくは身
体でも頭でも学ばなければならぬ職業、と
いうことを自分なりに考えた結果、自動車修
理の見習工を選びました。職業として他に大
工なども考えましたが、当時世界を回りたい
ということを考えていたものですから、世界
どこでも通用する技術、ということで自動車
整備士にしたわけです。

はじめは工場部門50~60人の工場に入り、
4年後にある事情で町工場へ移りました。自
動車修理というのは、幅も広い奥も深いん
ですわ。どの会社のどの車種も、何でも直せ
るようになるためには、どうしても10年、20
年かかるんです。途中(76年)、ヨーロッパ
モロッコへ1年間旅行した期間を除いて、あ
ちこちを自分自身で、昔のドイツのマイスタ
ーのように遍歴して回りました。



1980年5月10日
修理センター建築中のタイ人業者とラオス
人労働者(大工さん)

—1年間の外国旅行はいかがでしたか

とにかく、言葉の面でも、生活の面でも度
胸がつかしましたね。どんなところでも、最低
の生活はできるという自信を得ました。

帰ったから、大型バス、トラックの修理工
場へ入り、やや体力の限界を感じた面があり
ましたので、79年に職業訓練指導員(自動車
整備)の免許を取りました。

大学を出てからのこの約10年間は、準備期
間、何のためかはやめられないけれども、ぼく
自身の準備期間であったように思います。

—80年3月にタイに行き、ボラン
ティア活動に参加されるわけが
すが、その動機はどんなところ
にあったんですか。

動機といっても、複雑なものはないんです。
79年の秋から年末にかけて、カンボジアの難
民がずいぶんひどいことになっているという
記事が新聞に出ましたね。それを読みまして、
指導員の免許も取れたことだし、新しい職に
つくまでの3ヶ月くらいをボランティアで過
ごそう、という気持ちでタイへ飛んだんじ
です。プロだから自動車修理を教えられれば勿
論それもいいし、そうじゃなくて、運転手だ
も、井戸堀りだも、何かできるだろうと思い
ました。

外務省でも、ボランティアを一応募集して
いたけれども、かなりいい加減で、ぼくも79
年の終わりに応募したものの、ずっとほった
らかし。翌年2月に最終的な返事が来たので
すが、医者や看護婦以外は必要ない、個人ボ
ランティアなど行っても無駄だ、という冷た
いものでした。現地へ行けば何とかなるだろ
う——前のヨーロッパ旅行の経験もありまし
たから、そんな気持ちでバンコクに向ったの
です。

—その頃JVCは出来たばかりで
すね。

そうです。バンコクに着いた日、日曜日だ
ったので奉仕活動をしていた市内のアメリカ
系の教会をふたつ回ってみました。あまり
歓迎されない雰囲気でした。こちらが日本人
だから、ということもひとつあったでしょう
が、その頃は79年末と違って一応緊急事態は
脱している、短期のボランティアや資格のな
い人はお帰り下さいといったボランティア調
整の方針が、UNHCR(国連難民高等弁務
官事務所)などでもあったようです。

それで、翌日日本大使館に電話して日本人
会のことを教えてもらい、早速出掛けに行き
ました。ここがJVCの事務所なんです。が、
ガランとして誰も居ないんです。しばらく待
っていると、石松さんが、それから事務局長
の星野さんがやって来ました。ぼくは星野さ
んのことを男とばかり思っていたんだけど
も(笑)

その頃はJVCと看板は掲げていても、事務所には星野さんひとり、しかもいろいろな基本的なことがわからない、例えば難民キャンプに入るための許可証の取り方、どの誰に交渉すればいいの、それすらわからずに、あちこち聞いて回るといった、まったくの手探り状態でした。

2月中に、「難民を助ける会」の相馬会長と川口(節)JVC代表や星野さんらが各難民キャンプを回り、それぞれ何かは要が聞いてきて、その必要に応じた人を事務所へ募っていました。

——そこでウボンの自動車修理訓練プロジェクトを見つけたんですね。

ええ、ただ、すぐウボンに入れたわけではないんです。その頃星野さんは4月に日本に引き揚げる予定になっていました、役所まわりとか公的機関まわりとか、そうい、基礎から始めた方があなた自身にとっても有益だから、というので、バンコクに留まってそうした交渉から始めたんです。

ウボンに1度調査に出掛けて、プロジェクトの企画書を作り、タイ政府とUNHCRに提出して、許可のものをしばらく待ちました。こちら素人っぽい、たどたどしいアプローチの仕方だったのでしょうか、企画書を提出された向こう側も、JVCをどう扱っていいかわからない、「君ら本当にできるのか?」という感じでした。ただ現地は、タイ政府役人、UNHCR事務官、難民委員会を問わず、とても歓迎してくれましたけどね。

——出発当時のJVCの雰囲気はどんなものだったのでしょうか。

それは、さっきも言ったように五里霧中、本当の手探りの状態でした。日本から名々やってきた猛者がたくさんいて、「飯場回り」と称して、事務所へ仕事を見つけると、すぐ現場へ入っていく、翌日はまた別の現場へ行く、といった感じで動いていました。だから、お互いをあまり直接に知らなくて、事務所に残した各自の報告書を見て、ああ、どこで誰をさが何かやっているな、ということを知るくらいでした。この頃は、カンボジアの国境付近の難民キャンプの外に難民たちは、まだ非常に流動的で、衝突があったりして、回によって行けるところも違うし、また仕事も違っていましたからね。

まあこんな状態を、増えつつあった日本からの救援団体の視察団と現地とのパイプ役はそれなりに果していました。星野事務局長も川口代表も4月、5月には帰国してしまっ予定でしたし、このままでは夏頃にはつぶれてるだろう(笑)というふうにも思っていました。

——熊岡さんも当初3ヶ月だけのつもりだったのでしょうか。

それは、ウボンで自動車修理プロジェクトをやろうと思った段階で、最低1年はやらなければならないと覚悟しました。それで一応家族と、就職の決まっていた会社と連絡を取りました。両親は、昔からぼくのやることにあまり干渉はしませんので、9月頃一度戻ってこいというくらいを賛成してくれました。会社の方は、怒ったんでしょうか、返事もありませんでした。(笑)

——1980年4月、いよいよウボンに入るわけですが……

約1ヶ月ぐらい待ちされて、3月の末日にタイ政府とUNHCRの許可が出ました。

ウボンは、御承知の通りラオス難民キャンプで、ぼくが入ったときには約2万7千人住んでいました。その後の1年でアメリカ・フランス・カナダへ定住して行き、1万人近くに減っています。75年のラオス革命直後からのキャンプですが、それ以前からこちらに居る人もいます。75年以前は、東北タイとラオスはひとつの国のようなもので、ぼくらが思うようなはっきりとした国境線はなかったようですね。

ノンカイの難民キャンプはビエンチャンからの難民が多くて商人やインテリが多いのですが、ここはパワセ地方からの難民が多く、農民の割合が高いのです。第三国への定住も希望する組と、タイに留まってできたら祖国に戻りたいのだけれども、そういうわけにもいかず、何とはなしに、待っている組の、だいたいふたつに分かれるようです。

難民キャンプは、彼ら自身で作ったバンブーハウスが並び、多少ほこりっぽい、とは思いましたが、タイやラオスのどこにでもあるような、平和で落ちついた田舎町、といった印象でした。

——キャンプに入られて、何から始められたのですか。

まずは、キャンプの中に訓練所の建物を作るところから——正確に言えば、その交渉をタイの建築担当官を通して土産業者らとするところから、ウボンでのぼくの生活は始まりました。建物にかかる費用は10万バーツ(1バーツ約10円)、もしタイ人の教師を雇うならば、2人で年6万バーツの俸給でしたので、この中でいかに大きくて、よい建物を建てるかに苦労しました。建物はタテ14m、ヨコ25m、高さ5.5mで、約1ヶ月半で完成し、早速ぼくの助手をしてくれる先生と、それから生徒の募集に入りました。

— 助手の先生はタイ人ですか。

ウボンのタイ人2人とキャンプのラオス6人です。いずれも修理の経験があり、先生を希望する者の中から、面接して選びました。ラオス人の給料は、ひとり当月600バーツ（現在は800バーツ）払うことにしました。ラオス人の助手の中に、ウボンに入るバスの中で知りあったふたりの青年がいて、ボラテ君、ソムチ君というんですが、とても優秀で、その後ぼくはずいぶん助けられました。中国系ラオス人で、今は友人ともアメリカにいます。

— 生徒も面接したんですか。

ええ。できれば全部受け入れたかったんですが、教材にも限度があり、午前20人、午後20人にしぼってスタートしたんです。建物を建てているところから皆寄って来て見ましたから、募集時には350人ほどが押しかけました。それで、ぼくはだいたい3つの条件を面接の際に考えていたんです。ひとつは、自動車修理を将来職業としてやりたいと考えている者。つまり、暇つぶしや趣味では困る、ということです。2番目は、学習の年齢ということから、10代の後半から30歳前後を一中中心とする。3番目は、将来定住するだろう第三国で職につくことを考えて、少しでも英語ができれば、ということです。

コースは1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月と3つ作りしました。皆第三国への定住を申請して待っている。許可が出ると1週間以内にキャンプを出ていってしまうのです。いつその許可が出るかわかりませんので、例えば3ヶ月コースを終了した人でも、次に6ヶ月コースの4ヶ月目から入れる、というふうにできるだけ融通のきくものになりました。

— 訓練所に生徒として入ってくる難民キャンプの青年たちは、自分の将来についてどういうふうに考えているんでしょうか。

そうですね。日本だったらやっぱりそういう発想をしますよね。ところが、これはラオス人一般に言えることかもしれませんが、あまり将来について切羽詰まって考えないようなんです。まあ、せいぜいこのキャンプを出るところまでしか考えていないようです。日本人の平均的な考え方からは、かなり違うように思いました。

ラオス人気質といえば、例えば面接のとき、列をつくってくれない、あつと取り囲まれて收拾がつかずに困ってしまったことがありました。それで、一旦全員外に出てもらって、ひとりひとり呼んで、こちらに生徒3人づらいが居て面接をしたんですが、まるで警察みたいだ（笑）と言われたり……。

はじめはぼく自信そういうだらだらしたことが嫌いで、おかしいと思っていたんです。朝8時半に始めるから遅れないように、と言っておいでも、9時、10時にやって来る。

遅れたら入れない、ということまでやってたんですが、まああとから考えると遅れるにはキャンプでの作業とか、それなりの理由もあったんですよね。1つの間にかこちらがその感覚になじんでいってしまっていて……つまりラオス化したんでしょうか（笑）。暑い国ではむしろああでなくては生きられないんですよ。日本的な生き方をしようとするとは病気になるでしょう。

ぼくは24時間キャンプの中に居て生活してましたので、いわば“住人”でしたから、いろんなことが直に伝わってくる。長く生活する中で、日本的な生き方でない生き方があるということ、それはどちらかが優れているかというのではなくて、様々な基準があるんだ、ということ、頭でなしに、身体で学んだように思います。

— 親しい友人はできましたか。

ええ。先ほど話したボラテ=ソムチ君もそうですし……ぼくの場合、少し中国語ができることもあって中国系ラオス人の友人が多かったようです。それからUNなどで働いているタイ人の青年の中に、非常に優秀で良心的な人が多くいました。これは想像ですが、73年の学生革命をやった世代が、なかなか今、行動ができないということで、こうした公的機関に入って働いているのではないのでしょうか。随分彼らに助けられましたね。

— 熊岡さんのプロジェクトはJVCは勿論、UNでも評判がよかったようですが。

そうでしょうか。ぼく自身は、このプロジェクトが成功したとはいいいくと思ってるんです。4割成功、6割失敗——でしょうか。というのは、一人前の修理工を養成するには、道具ひとつにしても、もっとレベルの高いものを整備していなければならぬと思うんです。卒業していった人が、もっと何か



指導中の熊岡さん（黒板前、黒い服）



授業風景

を得てやるようなものにしなければいけない。お金の面とか、生徒がいつキャンプから出ていくかわからない、落ち着かない状態であったということも勿論ありますが、自分として、まだ納得がいけないんです。自動車修理のための基礎語辞典——この英・仏・ラオ・クメール語版を作ろうとしたんですが、これも挫折したままです。

——随分厳しいですね。欧米のボランティアが先に入っていたと思うんですが、どちらからの評判はいかがですか。

欧米のボランティアは、もう5年も前から入っているんです。ただ、彼らは第一段階の救済、つまり食糧・医療のサービスをするのがボランティアだと考えているらしくて、技術訓練までできるボランティアは殆んどいません。事実、ぼくが入るまで、そういうことは行なわれていませんでした。

ボランティアが果たして技術指導まですべきなのか、ということについては議論があります。救済活動の限界をどこにおくか、という問題です。例えば、難民に食糧を与えることは救済活動ですが、難民自身が汚した便所を掃除するのは、果たして救済活動といえるのかどうか。極論すれば、「仕事」は無理にでも作ることが出来るんです。その境の判断は難しいですね。今後難民が自立して生きることができるようになるための技術指導だとぼくらは考えているのですが――。

欧米のボランティアは仕事と割り切って来ていて、遊ぶ時にはさっと仕事をやめて遊びに行ってしまう。

日本の、とりわけ短期の人は、自分のやれる事は何でもしようという自己犠牲的な姿勢があって、とても爽やかな印象がありました。難民にも受け入れられ、とにかく人気があります。もっとも、地道な活動をやっていないからこそ、そんな風に出来るんだという批判が、欧米ボランティアの中にはありました。

——さて、一年間活動されて来られて、熊岡さん自身にとってボランティア活動とは何なのでしょうか。

そう――よくわからないなあ。やっぱり、自分がその中で生かされているから、これまでもやってこれたし、これからもやっていこうと思うんでしょうね。では、君は自分のために行くのか、と言われれば、それは逆転しているんじゃないかと。日本にいれば、恐らく自分の中で殺さなければならぬ何かを、生かして聞いていける、日本では歯車のひとつにならなければならぬ時もあるけれど、ここでは自分の全部を表現できる——そういう面があると思うんです。

ぼくはある意味で、日本とどこかうまく行かない、そのために流れてきた日本からの「精神的な難民」なのじゃないか、ということをして一年間やってきてわかったような気がするんです。

これまでずっと生きてきて、ぼくはその時その時で、自分にとっていいと思う道を選んできたし、それは物質的な徳には全く繋がっていないけれど、でもそれなりに自分は豊かになってきたなあと思っています。

——これから？

ぼくもうオス人と同じで(笑)あまり先まで考えないんです。少なくとも、これから1年間は向こうにいるつもりですが――。

——向こうの人と結婚して永住？

あり得ないこともないでしょうね(笑)。

(聞き手・岡本厚)

熊岡路矢氏の略歴

3月19日
(1981)

1947年	東京生まれ
1970年	自動車修理工見習
1976年	英国・欧州・モロッコ遊学 (1年間)
1977年	大型トラック・バスの修理工場勤務
1979年	3月1日 タイへ 3～11月 ウボン 自動車修理教習所 12月 JVC(BKK)オフィス
1981年	カオイダン・サカオ・カンフート視察 1～2月 と計画申請(カオイダンキャンプ) 2月28日 一時帰国(約4週間の予定)
1981年4月～	カオイダン キャンプにて 技術訓練所 開設(の予定)

タイ国内プロジェクト状況

1981年3月28日現在
J.V.C of Bangkok

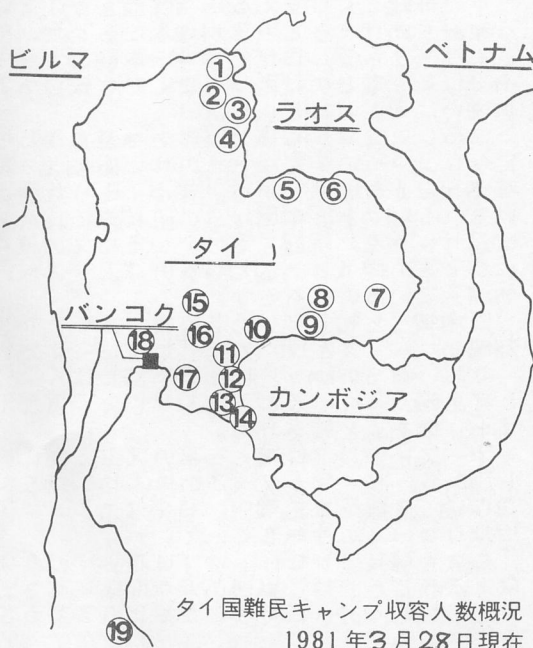
活動地名	進行状況	活動内容	活動費 拠出者名	担当者
ラボン (ラオス人キャンプ)	● 自動車整備教習所(昨年6月以来約250名の修了生を第3国へ送り出す) ● 私塾補助 ○英語クラス (14クラス・生徒500人) ○日本語クラス (初・中・上級の3クラス・生徒50人) ○ラオス語クラス (2クラス・生徒50人) ● 教育レクリエーション活動 (日・水・金・15時半～17時半活動・ラオス民族舞踊中心) ● 手芸作品 ● 織物学校 (教師ラオス人7人・生徒40人) ○ 図書室の設置	一般募金 神奈川県 神奈川県 一般募金 東千家 UNHCR	※(熊岡路矢) 大野直樹 マリー・マルチア・キャメル 伊藤 真理子・七沢 邦彦 中井久敏 金子一弘 山下夏美	
リンカーイ (ラオス人キャンプ)	● 日本語学校・Aクラス 生徒8名 全員のレベル一定・定住者用 ○Bクラス 生徒10名 レベルが一定していない人の為 ○Cクラス 生徒2名 Bクラスの補習を行う ● 学校運営補助 ● 教育レクリエーション活動 (教師ラオス人7名・生徒90人) ● 手芸作品の購入 (5クラス4ヵ所・担任制でほぼ10学校のシステムをとる) ● 運動用品(サッカーボール・なやとび・バトミントン等)の貸し出し	上智大学 一般募金 上智大学 一般募金	平賀 増美・久保豊弘 青木 哲子・小松崎 竜子 武田 長久	
ソングラー (バートナム人キャンプ)	● 手芸作品(箱)の材料供給と購入・販売 CO-OP(米国民間難民救済団体)によるハンディクラフト工房建設中 ● 公衆衛生(トイレ・シャワールームの修理・排水溝の清掃・ゴミの処理) ● 看護活動(眼病・皮膚病・火傷・切り傷の治療) ● 難民用仮設住宅建設(約200人収容可能住宅2棟完成・雇用難民労働) ● 花壇造設 着延べ64名)	一般募金 一般募金 一般募金 一般募金 一般募金	※ 浜口 功雄 島山 信 古賀道広 木原文 雄 久保田一郎 宮西 ヒロミチ・山田 ミチ子 原田 芙蓉	
アランヤプラテート タイ・カンボジア (国境・地域活動拠点)	● 物資輸送(野菜の種・農耕具・学用品・毛布・宮中駆除用農薬) ● 小規模キャンプ支援 ● CARE(米国民間ボランティア団体)の配給する補助食料の補助	西本願寺 CAREの活動に参加	※ 西崎 寛司 田原 昌成 河西マリ	
カオイダン (カンボジア人キャンプ)	○ 自動車整備教習所(小型エンジン・自動二輪車・自転車も対象とする修理訓練・生徒月80名・年間960名の予定) ● 井戸掘り	UNHCR UNHCR	※ 熊岡路矢 伊藤 浄樹 ※ 菅田 健一 ※ 相沢 秀夫 鈴木ミチ子 柳沢道寛 村上純子 山隈 小春 拓植あけみ・小池嘉明 クリス・マイグイス・タマン	
パンナムニコム (第3国定住待ちの人達の一時的収容施設)	● 教育レクリエーション活動(ダンス・英語・クメール語・数学の指導・図書活動)	神奈川県	※ 相沢 秀夫 鈴木ミチ子 柳沢道寛 村上純子 山隈 小春 拓植あけみ・小池嘉明 クリス・マイグイス・タマン	
クロントーイ (バンコク市内のスラム)	● 電気工養成訓練所(スラムに住む人々のための職業訓練所・内容は家庭内配線・1日2時間3ヶ月コース・生徒数15名・教師はタイ人) ● プラチーフ財団への奨学金援助 ● 道路補修・環境整備 ● 図書活動(閲覧のみ)・図書館建設工事実施中	一般募金 一般募金 神奈川県	※ 福岡 州馬 皆川伸幸・紫田 紀子 菊池 明男・ニールバー	
ブリラム県 14ヶ村 (東北タイ)	● 児童遊具施設建設	神奈川県 ※山本敏幸・村山 龍弘・清水 裕子・金子哲也・加藤 敦紀・青森良樹・金田 容弘 大場佐知子・正木 敏七・中沢 幸彦・平野 幸子・大場 真理・菊池 信一・羽田 弘昭 斎藤 一典・柴田 久史・中沢 良・東田 寛子・武田 真彦・川崎 肇・上原 陽子 黒川 裕二・穴戸 望・大木 恵美子・大林 俊介・久富 文子・野中 泉・野々村 寛 藤田 有子・竹田 三子・相田 俊一・高崎 三子・城市 隆利・懸 俊介・瀬井 弘幸 今村 尚子・堀 みえ子・村野 文子・矢口 洋生・大谷 徹也・富田 正人・谷川 完生 村上 明男・荻野 美智子		
バンコク事務所	● 事務 ● 会計 ● 総務 ● 編集 ● レンダー・衣料配布及び整理 ● ジャスマガ衣料整理 ● ハンディクラフト	星野昌子(事務局長)・クリス・シュルマン・大石由美子・ソノコイ 橋本百合子・横堀雅子・伊藤 清子・上田 麗子・今村 信子・磯村美智子・奥本弘子 花崎 啓子・上田 美子・松村 悠子・尾谷 暢子・山内 暢子・小川 寿美子・深谷 範子・佐田 悦子 星野 善夫・松崎 雅子・岩崎 美佐子・岡崎 律子 道代 トシロビツル・牧野 千佳子・前田 卓子・山崎 美智子・吉井 康子・本多 加津子 竹島 節子・林由紀子・海老原 美子 地 聖いこ子・黒川 恵子・八田 さと子・小林 正枝		
東京連絡事務所	● 事務・機関誌編集	※ 税田 芳三・大久保 俊彦・水野 孝昭・河井 淳一・峰野 美智子・戸田 耐子・黒川 京子・谷沢 一江		
● 実施中口計画 中 ※ リーダー・一般募金とは、特にその用途に指示のされていないものを指す。				

● 実施中の計画 ● リーダー ● 一般募金 とは、特にその便途に指示のされていないものを指す。

JVCプロジェクト必要人員一覧表

1981年3月現在

活動地	活動内容	期間	人数
ソクラ (キャンプ)	下水道工事、バック建設 (カ仕事、女性でも可) —ボランティアの減少による求人—	6ヵ月以上 (至 急)	3
ウボン (キャンプ)	・日本語教師(免許必要) ・レクリエーション指導 ・図書館運営 ・ハンディクラフト(花芸品)の指導、買付け —以上ボランティアの減少による求人—	3ヵ月以上(6月期) 3ヵ月以上(7月期) 3ヵ月以上(6月期) 3ヵ月以上(6月期)	1 1 1 1
バンビナイ (キャンプ)	・下水道工事、環境衛生 —プロジェクト新設による求人—	3ヵ月以上 (8月期、1ヵ月以上でも可)	3
カオイダン (キャンプ)	・自動車、バイク等修理技術 学校教師補佐 —プロジェクト新設による求人—	3ヵ月以上 (6月期)	1
パナニコム (キャンプ)	・レクリエーション指導 —ボランティア減少による求人—	3ヵ月以上 (1ヵ月以上でも可、至急)	1
国境 (国境地域のタイ 農村・難民キャンプ)	・井戸掘り (カ仕事、女性でも可) —プロジェクト新設による求人—	1ヵ月以上 (至 急)	5
クロンタイ (バンコク市内 スラム)	・図書館建設、コミュニティーセンター建設 (工事、建築専門家及び肉体労働者) —プロジェクト新設による求人—	3ヵ月以上 (至 急)	3
フリラム (タイ国農村)	・調査活動補佐 —プロジェクト新設による求人—	3ヵ月以上 (7月期)	1
バンコク オフィス	・秘書、事務作業 —ボランティアの減少による求人—	3ヵ月以上 (至 急)	3



	キャンプ名	国 別	2月28日	2月15日
1	チェンコン	L	4,680	4,970
2	チェンカム	L	3,375	3,376
3	バンナムヤオ	L	9,551	9,769
4	ソプトアン	L	8,135	8,293
5	バンビナイ	L	30,133	29,902
6	ノンカーイ	L	26,564	27,832
7	ウボン	L	18,179	19,058
8	ルンバック(スリン)	K	2,748	2,174
9	カプチュアン	K	8,081	8,052
10	カオイダン	K	50,813	51,561
11	アランヤプラテート	K	1,890	1,944
12	カンブット	K	16,898	17,804
13	ラエムシン	V	—	—
14	マイルート	K	9,829	11,343
15	シキウ	L.K	1,419	1,702
16	サケオ	K	—	—
17	パナニコム	K.L.V	11,249	12,804
18	ルンピニ	K.L.V	—	990
19	ソクラ	V	4,627	6,263

収容されている難民の国別

K…カンボジア L…ラオス V…ベトナム

※「—」は情報未入

水野孝昭

○ スアンプルー・トランジット・センター

昨年6月、バンコク市内のスアンプルー・トランジット・センター(第三国出国者の一時滞在所)で、知り合いの難民とともに空港行きのバスが来るのを待っていた。

スアンプルー・トランジット・センターの生活環境はキャンプのそれよりむしろ悪い程だった。出入国管理所の片隅の建物の裏には湿地帯の上にスラムが広がし、隣には生ゴミの山。すえたような匂いが鼻をつく刑務所の一階が出国していく難民たちに割当てられていた。狭苦しい場所に一杯に押しこめられ、老若男女がコンクリートの上にゴザ一枚を敷いてズラリと横たわっていた。

第三国への出国を希望する難民は、国境周辺に点在するホールディングセンター(いわゆる「難民キャンプ」)で、各国調査員のインタビューに答えて家族肉親がその国に住んでいたりして受け入れ条件を満たしていると認められると、バンコク市内周辺にあるトランジット・センターに移されるというのが当時のシステムだった。

ここで彼らは自分の出国の順番が来るのをひたすら待つ。待つ期間には人によってまちまち。着いた日の翌日には空港へという幸せ者もいれば、半年近くもナシのつづきのまま放置されている人もいる。出国前に行なわれる健康診断でストップをかけられた人はどんな気持ちでいることだろうか。

念願の第三国行きをもう目前にしながら、しかしそれを自ら決めた手の届かない外の力に呑み込まれるのを、唯待つしかない状態に置かれている苛立ちと不安の色は、定住後の生活の夢や先に行った家族知人のことを話す時の生き生きとした表情とは対照的だった。

手続きのミスで、出発者のリストから名前が落ちてしまったりすることもある。漸く出発日時が決まっても、理由も告げられぬまま突然延期されたりすることもしばしばだった。

○「もはや難民ではない」

いよいよ念願のバスがやって来る。センターの内側では大変な騒ぎだ。ゴザ一枚しか見なかったのに、一体何処に隠れていたのかと思う程たくさんの荷物を抱え(とは言っても、これが彼らの全財産なのだ)、どこかちぐはぐな古着ながら精一杯飾り立て、門の内側に一列に並び、子供たちは大はしゃぎ。荷物や人の間を駆け回る。たしなめる親の表情にも、心無しかゆとりが感じられ、中には美しく御化粧した人もちらほらと見かける。

点呼が済み、門がゆっくりと開き始める。と、誰も彼もバスに向かってころばんばかりの勢いで走り始めた。片手でひと抱えもある中古のスーツケースを重そうに引きずり、もう一方の手で子供の手をしっかりと握りしめ、よちよちと、それでも懸命に駆けていく。一目散に走ってバスに乗り込む。

一体何年に及んだことだろう。余りにも長かった「飼育」から解放される瞬間だ。

乗り込んだバスが出発のエンジンをひかせ始めた時、握手しながら「君は今からもう難民ではない」と私が言ったら、「イエス」と白い歯が満面にこぼれて、ぎゅっと力強く私の手を握り返した。

○ 定住してから

先日、中国からの引揚げ者が、日本の生活に馴染むことができず、ノイローゼに陥って隣人二人を刺し殺すという痛ましい事件が起きた。この事件の背景を詳しく伝えた4月15日付朝日新聞夕刊によると、多くの帰国者がまずぶつかる壁として、日本語の習得と就職問題の二つを挙げていた。これがそのままインドシナからの定住者にもあてはまることは言うまでもない。「専門のカウンセラーが世話をし、言葉のわかる人がそばにいる環境を」と訴える中国からの引揚げ者の世話をしている生活保護者施設管理者の言葉は切実に胸に響く。頭脳20才の犯人の勤め先での仕事ぶりには極めて熱心だった。4ヶ月間日本語学に通ったが、母親一人が支える生活保護を受けている家計を助けようと中華料理店に勤めた。ウェイターを希望したがやはり日本語の力が十分でなく、客との対応がうまくできないので血まじりに回されたという。

こうした突発的な事件にまでは至らずとも、定住センターの卒業生たちの中に離職者・転職者が目立ち始めている。まるっきり放置されている観のある中国からの引揚げ者に比べれば遥かに手厚い保護を受けているはずの彼らにしてこの現状であるというのは、一体何を物語っているのだろうか。

日頃彼らと接しているあるボランティアは、離職のニュースを聞く毎に「たった一歳であっても、彼らの訥々とした日本語にじゅくじゅくと耳を傾けにくくなるような人が増えてくればなあ」と残念がる。

オーストラリアに渡った私のスアンプルー・トランジット・センターでの知人は、現在大学に通って数学を勉強中。将来はエンジニアになりたいとの手紙を書いた。

「もはや難民ではない」はずの彼らが隣人になれるかどうかは、周囲の人々のほんのちょっとした心づかいに大きく左右されるようだ。

(1981年4月29日現在)年間購読者

塚田 えみ子	清水 楓	小沢 洋美	望月 潤子	福田 始	大貫 玲子	春木 薫
好光 紀	森田 聡子	蛭 川い子	鈴木 忠雄	相澤 俊栄	留岡 信雄	三野 光男
自動車連福社	小宮山 千枝子	万木 弘美	長島 正	坂本 紀子	及川 浩吉	多全社協.国際児
ボランティア光	峰野 政次	堤 真美	藤田 容子	土佐 真知子	安孫子 芳樹	童年救金実行委員会
姫路定住センター	藤本 高男	山田 智	伊藤 典子	小松 美都里	岡本 万里子	小野 正道
浜本 正子	新井 良ハ	山下 徳子	野前 利治	辰濃 和男	鈴木 泉	彼谷 康子
井上 博夫	岩本 伊律子	渡辺 ハ重子	中村 日哲	黒川 裕二	東 石司	楠 正英
(財)エロジ研究所	魚田 真	甲斐田 万智子	金山 麻美	橋本 悦子	斎藤 裕子	工藤 英司
情報センター	七沢 邦彦	山口 龍行	三好 浩孝	木内 敦夫	中島 安彦	野上 貞子
北山 秀樹	前沢 孝道	佐藤 幸江	田島 早苗	綿方 啓子	アソ.難民救済会	南向 正生
本外 健一	川中 信	植竹 久美子	尾原 民雄	清水 俊夫	川上 湛永	萩原 俊紹
岡本 幸子	箕山 ユリア	二宮 悦子	荻野 美智子	松本 るみ	江本 嘉伸	金沢北エロジ
平野 恭男	岡本章(在日中国支部)	谷 和子	徳田 律子	得丸 公明	木村 隆生	支部
宮田 いと子	増田 裕雄	篠原 昇	古西 勇	鮫島 穂	吉中 由美子	小牧 久芳
高瀬 寧	塩谷 今日子	須藤 孝志	岡本 和子			

(申込順:敬称略は賛助購読者)

年間購読者募集中

JVC (海外ボランティアセンター)
東京連絡事務所では

JVC(海外ボランティアセンター)
東京連絡事務所では、インドシナ難民
救済活動の輪を広げるため購読者を募
っています。

購読者の方々には毎月機関誌「Trial
& Error」を送付すると共に、講演会、
写真展等のお知らせを致します。

年間購読者の種別と購読料は次の通
りです。

○賛助購読者 年間1口 10,000円
(団体・法人) 1口につき毎月4部送付

○一般購読者 年間1口 3,000円
(個人) 1口につき毎月1部送付

一申し込み方法一

郵便振替にて。
口座番号 東京3-54186

通信欄に住所、氏名、学校または勤
務先を明記のうえ、購読種別と購読
開始月もお忘れなくお申し込み下さ
い。

〒166

東京都杉並区阿佐谷南1-1-5

JVC(海外ボランティアセンター)東京連絡事
務所

TEL 03-316-3253

JVCでは、難民救済活動をより充
実したものにすることができるよう、
以下の募金を募っています。

○インドシナ難民救済募金

は東京連絡事務所を窓口にしバンコ
クに送られ、現地での有効なプロジェ
クト費(P12)として使われています。

○アフリカ飢饉救済募金

は、ユニセフ(国際連合児童基金)を
通しアフリカの飢饉及び政変などで飢
饉線上にいる人々に食糧、水援助等
の形で使われています。

この他に、現地で活動しているボラ
ンティアのための栄養及び健康管理費
としてボランティア募金を募っていま
す。

J.V.C とは

J.V.Cは、1980年2月バンコク
に設けられた民間難民救援団体で
す。募金や各民間団体等の支援を
受けながら、タイ国内の難民キャ
ンプとスラム街、農村で救援活動
に携わっています。

同年4月には、CCSDPT(タ
イ国に於ける避難民救援連絡委員
会)に登録されました。

会計報告 (1981.2.16~3.15)

単位は円.現在1バツ約10円

内 容	収 入	支 出	残 高
前 日 残			4,196.779 ²⁹
寄付送金	485.128 ²⁸		
事業費		474.421 ²⁵	
事務経費		75.213	
銀行利子	152.954 ⁵⁰		
計	638.083 ²⁸	549.634 ²⁵	4,285.228 ²⁹
		差引残高	4,285.228 ²⁹

事業費内訳

プロジェクト	内 容	金 額
ノンカーイ	活動費	76.184
ウボン	活動費	40.000
ウボン	織物学校	63.277
ウボン(VNHCR)	図書館	20.000
カオイダン	活動費	6.000
ソングラ	活動費	18.000
ハナニユム	活動費	38.340
タイ国内(クントイ)	活動費	32.044 ²⁵
ブリラム	活動費	122.500
アラヤフプラト	活動費	26.000
事業費	オフィス用	20.000
BKKボランティアホーム	家賃その他	5.476 ⁵⁰
ソングラ	Tシャツ作成	6.599 ⁵⁰

1981.2.16~5.20

。今回の寄付者(敬称略)

宮崎クリスチャン、宮崎県建築技術センター
いけはなインターナショナル、玉栄幼稚園園児
一同、グリーンハイッコラス部一同、浄土真宗
本願寺、高岡教区寺族青年会、三井銀行
バンコク支店、裏千家。

(以上 バンコク)

長島達男、渡辺八重子、飯塚まね、むつみ
埼玉医科大学学生会、青森市連合P.T.A、総理府
青少年対策本部青年の船、川崎 満孝、師岡文
男、栗野鳳、野上貞子、花島 真里子、小松 博史
横堀雅子、森田聡子、日野、新垣三千穂
下村美智子、正木欽七、山本久海、香木薫、
末日聖徒伝スキルス教会、山田有佐雄、カハター事
務所、トム・クロ・ビル (以上 東京)

。今回の寄贈者(敬称略)

相田、モラロ ジー石研究所、池田 静子、天理教
宮崎県青年隊、宮崎クリスチャン、カンボジア難
民救済会、田島、田中、裏千家、梅井 均

(以上 バンコク)

山辺中学3年2組、高木百合子、加藤明彦
三上 鬼子、朝日新聞、小林武中

(以上 東京)

編集後記

読者の皆様に、Trial & Error 第5号の刊行が
ひと月も遅れた事を深くお詫び致します。単に
西崎さんの悲しい事件の突発のみならず、今回
の刊行の遅れの原因には財政面、人員面の問題
があります。郵便料金も値上がりし、従来の活
字印刷では経費がかさみますので今月から手書
芝印刷に変えさせて頂きました。突然の変更で
すが、今後も読み易く、より現地の生の声を反
映させて行くよう内容に一層の充実をはかって
行きますので、よろしく御了承のほどお願い申
上げます。

Trial & Errorは難民問題に関心を寄せる人た
ちみんなで作る機関誌です。読者の皆様一人
一人にも積極的な参加協力をお願いします。原稿
を書くのかちょっと苦手な方でも、編集、レイ
アウトという大切な仕事がありますし、時間的
に余裕のある方は簡単な事務を、また読んで後
で感じた事などを家族の者や友人に語りかける
だけでも、一つの立派な活動への参加です。

「現場」は海の向うにだけあるものではありません。
すでに600人以上の人が日本を「第二の祖
国」として選び、言葉は勿論のこと、ものの考え
方から生活習慣まで全く異なる環境に適應しよ
うと懸命の努力を続けています。又北は北海道
から南は沖縄に至るまで2000人近い一時滞在難
民が約30箇所の施設で暮らしています。

もし、そうした人を知ったら、日本人に対す
るのと同じ様に「こんにちは」と笑顔で挨拶し
て下さい。「何かしてあげなければ」と肩に力を
入れる前に、同じ人間としてその人と気持ちさ

通わせることが大切だと思います。その時
相手がどんな事で困っていて、自分に何
ができるかは、きり解ることでしょう。
こうした体験の記録、難民問題につい
ての自分なりの考え、Trial & Errorを読
んでの感想、要望、批判その他何でも結
構ですので是非私たちの所にお送り下さ
い。

その全てを貴重な記録として大切に保
管し、いつでも誰でも目を通せる様にし
て、あなたの手紙があなたの知らないこ
ろで一人一人がもっている気持ちを介
けあいしたいと考えています。

Japanese Volunteer Center 機関誌 Trial & Error (試行錯誤)

毎月20日発行

発行人 税田 芳三

編集人 大久保俊彦

発行所 JVC(海外ボランティアセンター)
東京連絡事務所

〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5

TEL 03-316-3253

最寄駅 (地) 丸の内線・新高円寺駅B7車

表紙写真 野中 章弘

印刷所 ゆたか印刷

定価 1部300円